
twilight world

江角 稚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

t w i l i g h t w o r l d

【Nコード】

N 6 7 0 4 X

【作者名】

江角 稚

【あらすじ】

とある男の逃亡日記。

今、言えるのはそれだけです。そもそもt w i l i g h tとは、はつきりしない状況、やみの部分、”と言う意味ですから。”

曖昧なる世界に、包まれて見て下さいませ。

第一話（前書き）

ちよこちよこ書き溜めて、しばらく溜まったら投下する…と言うつ、マイペースな物を一つ作ろうかと。

頑張つて”ハイペースなマイペース”になれば良いのですが。

とか言つて、また散策するのでしょうか。理由は、ネタ探しです。

第一話

「俺は女を殺した。殺してしまった。じきに警察が、此処にやって来るだろう。その前に、逃げなければ。どうしても此処から、逃げ出さなければ……」

そして気がついたら、俺は狭い裏路地にいた。薄暗さが奇妙な温もりを作り、俺を匿うように抱いてくれる。

さて、どうしたものか。

俺はひとまず落ち着いて、呼吸を整えてから考えた。

…随分と走ったようだ。周りの景色が、何もかもが分からぬ。まるで、異国の地へと迷い込んだようだ。

土地勘がなければ、逃げるのは不利だ。かと言って、自宅へ帰る気にもなれない。

もしも俺が殺人犯だと知れたら、捕まってしまうから。どうしても俺は、捕まることを避けねばならない。

幸い、仕事も尋ねて来る友人もない。親も、とっくの昔に亡くなった。俺が帰らなくとも、不審がる人物などいない。

かと言って、いつまでも逃げ続ける訳にもいかないのだが。

一体、どうすれば良いのだろう。

しかし、疲れた。これ程の距離を走ったのは、久しぶりだ。
ああ、もう駄目だ…。

また、意識は遠退いていった。

朝だ。俺はこのまま、一夜を明かしたらしい。人通りの少ない道が
幸運をもたらしたのか。それとも、ただ酔い潰れたサラリーマンに
しか見えなかったのか。

どうでも良いが、こんなラッキーがいつまでも続くとは思えない。
今晚は、何処か別の場所へ行かなくては。

それにしても…腹が減った。喉も渴いている。

それもそうだ。夕べから、何も口にしていないのだから。

夕べは、何があったんだっけ。
上手く思い出せない。

白く細い、女の首筋。

跳ねる喉。

力を込めた指先。

そして、事が終わった後に押し寄せる、引っ掛かれた傷の痛み。

…ああ、そうだ。

俺は、逃亡中の殺人犯だったっけ。

ふと見ると、両腕には引っ掻き傷が残っていた。まるで、断末魔の叫びを腕に描いたような美術性。

その刻み込まれた作品に、俺の興味はちつとも湧きもしなかったが。

ただ、痛みはない。

残ったのは、ただのミミズ腫れだけだ。

勿論、この傷を見たからと言って、心が痛むこともなく。

何と無く、傷が癒える頃には殺人のことも、綺麗さっぱり忘れられる気がした。

第二話

この見知らぬ街をさ迷うこと、三時間。
初見の地は不慣れだ。

…しかし、地図を買う訳にもいかず。

もしこのタイミングで地図などを買ひ、俺がこの街の新参者だと世間に知れたら——疑われることこの上ない。

と、言う訳で。

仕方なしに、徒歩で巡る。昼間とは言え、人通りの多い街を。

もしも今が冬なら、コートの襟を立てて顔を隠すことも出来るのだが…あいにく今は、望みとは正反対の季節だ。

——いや。正確には、もう夏ではない。

暦上では、もう九月下旬だ。それなのにこの残暑とも言つべき蒸し暑さは、真夏を感じさせる。特に、頭上でギラギラ照り付ける太陽とか。

夕べはアスファルトからなる路上で眠ったからか、腰も痛いし眠気も覚めない。きっと眠りが浅かったんだ。——もしくは、殺人のために興奮して眠れなかったか。

それでも、女一人殺し、この街まで命からがら逃げ切った疲れで気を失った、とも考えられるが。

…とにかく。

眠い。…眠い。ねむい。

その三文字が、頭の中をグルグルと駆け巡る。

”眠いなあ…” 声にならないため、心の中で呟く。

そう、喉は未だに渴いたままなのだ。さっき自販機は見付けた。だが、残り少ない小銭を使いたくなかったのだ。

ちくしょう。札入れも通帳も、全部家に置いて来ちまった。

… たまたま小銭入れが上着のポケットに入っていたのは、不幸中の幸いなのだが。

表通りは目立つため、脇道に入る。そして裏道の入り込み具合に驚いた。

”まるで… 迷路だな”

迷子になったら最後、抜け出すことも難しい。いや、いざとなったら隠れやすい、とも言い換えられるか。

そんなことを考えていると、前から大勢の人がやって来た。

第三話

一体、誰だ？

建物の陰になっっているため、薄暗くてよく見えないが……。

まさか。

警察？

もう、此処まで追いつかれたのか。

やはり税金の無駄遣いではない。きっちりと仕事はしているのか。

仕方ない… 此処で捕まる…

… 訳には行かない。

俺は、周りを見渡した。

しかし細い路地は両側とも壁だ。逃げるための脇道もない。

引き返すか… 振り返ると、向こうからも人々の気配。

—— 挟まれた。

悟った、捕まることを。

逃げなくては。

… 分かっているのに、体は動かなくて。

両方向から近付いて来る姿なき敵は、まるで示し合わせたかのように、同時に目の前に現れた。

…不良？

いや、違う。かも、しれない。

鉄パイプやバットを引きずり、近付いてくる集団。それだけ見れば、不良に見えなくもない。

——って、

やばいな…この状況。

どうするか。どうするよ？

ってか、本当にどうすんの？

「おい」視界右側、先頭の男が話し掛ける。「有り金全部寄越せ」

「…どちら様、ですか」掠れた声を絞り出すように、言った。喉の渇きからか、恐怖からか。

見た所、不良とは違うようだが。武器は持っているし、数が数だ。これは…どうしたことだろう。

もしかすると、私服警官かもしれない。…にしては、ガラが悪過ぎるが…。

「お前に名乗る名など、ない」男は答える。「とにかく、財布を渡して貰おうか」

「…無理だな」俺は正直に言った。「訳あり、でな。財布はない」

財布は。

小銭はあるが…当てにならない程度。
しかも、それを取られたら生活出来ない。

「財布がない…だと？」男は問う。

「ああ」…声が、出なくなってきた。

「馬鹿にするな。今の御時世、何処に手ぶらで出歩く奴がいる」苛立たしげに、男は金属バットをアスファルトに打ち付けた。ガギイン、と、嫌な音を響かせる。

「いるさ、此処に」強がりと言う。しかし、状況は良くない。細い路地裏で、逃げ道はない。左右を武装した？男達に囲まれている。

俺は周りをざっと見た。

感想。…多い。

何だこれは。二十人ずつ、計四十人と言った所か。まるで不良クラスを丸ごと路地に押し込んだようだ。

…何で俺は、こんなに冷静なんだろう。

強行手段に出た男達が、一斉に、金属製の物体を振りかざしていると言っのに。

何か、叫び声が聞こえる。だが、何と言っているのか分からない。

「やっちまえ！！」的な声かな。そんなことを考えながら、頭目掛けて振り下ろされるバットを見ていた。

…取り敢えず、腕でガードしましたよ。

でも、痛い。

腕の痛みに怯んだ隙に、二本目のバットが目前に迫る。

防ぎ切れない。

”ぐあ…” 枯れ切った喉からは、叫びにならない声が漏れた。

…走馬灯。

来ないじゃないか。

死なない、のか？

頭は割れる程、痛いのに。

ちら、と一瞬だけ、流れた映像は。

よりによって、殺した女の苦しげな表情だった。

何てこった…。

俺は罪から、逃れられないって訳か。

妙に納得しながら、俺は意識を失って倒れ込んだ。

第四話

目を開くと、意識はぼんやりとしていた。

俺、死んだのか。

とうとう死んじまったのか。

…あれ、三途の川は何処だろう。

辺りを見渡すと、女性が一人、立っている。

「すみません。三途の川は何処ですか？」俺は彼女に声をかける。
流石はあの世だ。もう、普通の声で話すことが出来る。あんなに、
喉は枯れていたはずなのに。

…って、何聞いてるんだ？俺は。

彼女はなかなか振り返らない。

そもそも、変な男から突然”三途の川は何処か”なんて聞かれたら
普通は振り向かない。少なくとも、俺だったら振り向かないな。

それにしても、彼女は一体何者なのだろう。

三途の川の番人、とか？

…あ。

もしかしたら、三途の川を渡れない人か。

訳合って、渡れない人がいる。

現世で生死をさ迷っている人とか、

…後は？

”とか”って言った割には、他の事例が浮かばない。

ああ、そう言えば。

俺はあの世についてよく知らないが、昔、こんな話を聞いたことがある。

女性が死んだ場合、彼女の処女を奪った人が三途の川の手前で待っていて、彼女を連れて川を渡るらしい。

その男が先に死んでいれば、待っていてくれるのだとか。

ちなみに、男がまだ生きている場合は、彼女が三途の川の手前で待っていないとはいけないんだとか。

一人では三途の川は渡れないから…らしいが。

その話を聞いた時、一瞬、素敵だな、とか思つかもしれない。

けどさ。

じゃあ、処女、並びに童貞の方々は一体どうするんだよ。一人で渡れって言っのか？

——って、矛盾にツッコミを入れなくなる。

皆、渡れなくて水遊びでもするのかな。

…三途の川で？

何だか、馬鹿馬鹿しくなった。
ま、どっちにしろ俺には関係ないし。

…何だよ。

別に良いじゃねーか。

俺のことなんてほっとけ。

——今、思うとき。

じゃあ逆に、プレイボーイ並びにプレイガールはどうするのか？

団体さんが全員揃うまで、待ってるのかな。
それとも男は、何往復もするのかな。

やっぱり、馬鹿馬鹿しくなった。
ま、どっちにしろ俺には関係ないし…。

ちょっとは、あるのか？

…うーん、あるかもしれない。

でも俺は、人並みと言つか標準と言つか…。

いや、止めておこう。

これ以上、何か喋ると、言い訳がましく聞こえるから。

…何だよ。

別に良いじゃねーか。

やっぱり、俺のことなんてほっとけ。

俺は独身貴族を貫くって、決めてるんだから。

——今笑った奴、あの世から化けて出て来るから待っつけ。

…まあ良いや。

とにかく、川を見付けるのが先だ。

俺、死んだのか。

本当に、死んじゃったのか。

もしかすると、あの女性は誰かが死ぬのを待ってるのか？

本当に死ぬ人にしか、川は見えないのか？

…ちょっと待て。

俺にはまだ、川も何も見えてないぞ。

俺、死んだのか？

本当に、死んじゃったのか？

…分かん。

金属バットで殴られて、頭がぐらぐらしていたのは覚えているが…。

あの女性には、川は見えているのだろうか。

それも含めて、聞いてみよう。

「すみません」俺はもう一度、声をかけた。

「…何でしょう」女性は振り向かずに戻る。

…あれ？

聞き覚えのある声だ。

まさか、”誰か”じゃなくて”俺”が死ぬのを待ってた人…とか、
言わないよな。

あんな、長い髪の美しい女性を相手にした覚えは…あ、でも、正直、
後ろ姿は好みだし。

忘れちゃってるだけで、昔、付き合ってた人だったりして。

「三途の川は、何処ですか？」…だから、さっきから何なんだ。こ
の問いの文章を変える気が、俺にはないのだろうか。

「三途の川、ですか？」女性は聞き返す。「あるじゃないですか、
目の前に」

「目の前？」俺は目を凝らす。まばたきをしたり、目をこすったり。
でも。

「いや…俺には見えないんですけど」

確かに、見えなかった。

三途の川も、天国や地獄でさえも。

そこには、草原が広がっているだけだった。

「おかしいですね」女性は答える。「私には、はっきりと見えるの
ですが」

「じゃあ、俺は…まだ死んでない、ってことか？」

頭の中で思ったただけだったが、つい口に出してしまった。

その言葉を聞いて、彼女は問う。

「貴方、死んでないの？」

「…いや、仮定だよ。だって君に見えている三途の川は、俺には見えてない…」 「貴方、死んでないの？」

彼女は俺の言葉を遮った。

「…多分」何だろう。

俺は怒られているような気分だ。

前にもこんなこと、あったような…。

「そう…貴方、死んでないのね」哀しげにも聞こえる、沈んだ声。

そして振り返る彼女は、こう言った。

「——私は、貴方に殺されたのに」

第五話（前書き）

PVが100を超えました

皆様、ありがとうございます！！

第五話

「うあああああ…!!」

俺は叫びながら目覚めた。

…ん？目覚めた？

周りを見渡すと、そこは公園だった。

草原も、三途の川も、天国や地獄も見えない。

…生きてるのか？

た、助かったあ…。

思った瞬間、頭痛に顔をしかめる。

手で傷口に触れると、赤黒い固まりが指にこびりついた。

…眠い。

どうせ、生きているんだし。

取り敢えず、状況確認よりも先に…。

寝かせてくれ。

朦朧とした意識の中で、瞼を閉じる。

俺はさつき、三途の川の手前…と言っか草原で、夢？の中で見た女の姿を呼び起こした。

髪が長くて綺麗な女。

首筋に、手形の痣を付けた女。

哀しげに、俺が死んでいないことを悔やむ女。
それでいて、憎まない。

彼女は、俺を憎めない。

そう言う奴だ。昔から…。

……。

俺は彼女の、何の”昔”を知っていたと言っのдароつ。

上辺だけ取り繕って、本当はちゃんと見ていなかった気すらする。

ごめんな。

こんな、勝手な俺で。

それでいて、殺したことも、

…お前との思い出すらも全て、忘れようとしていた。

殺すことで、逃れられると思ったのに。

殺すことで、記憶に刻み込まれた。

…まるで、この両腕の傷のように。

ごめん…でも、俺。

お前を殺したこと、後悔していない。

その上、もう一つ。

謝らなくちゃいけないことがある。

それは…。

第六話

「おい、いい加減起きろ」

その声に、また瞼を開く。

そこには、先程俺に金をせびった男が立っていた。後ろには、俺を殴った男も。… ついでに、俺の血が付いた金属バットを持って。

そんな物騒な物、血の主に見せ付けるなんて… 腹黒い奴め。思いながら、辺りを見渡す。

先程、目を覚ました時は気付かなかったが、両手両足をロープで結ばれていた。

いよいよ、本格的な尋問（取り調べ）か。
ま、黙秘権を最大に發揮させて貰うけどね。

… 何たって、俺に語ることなど何もないのだから。

大体、警察がバットで殴り掛かる、とか、その他色々駄目だろう。

… あれ。

もしかして、警察じゃないのかな。

そう言えば、拘束されている手足。
手錠じゃなくて、ロープが使われている。

… と、すると…。

この男達。

一体、誰だ？

…何のために、俺を拘束する？

目的は金だけじゃない、って訳か。

「いくつか、質問に答えて貰う」男が、また言った。

「…どうぞ。俺の答えられる範囲なら」言いながら、普通に話せることに気付いた。「その前に…一つ聞きたいことがある」

「何だ」「俺に、水が何か与えてくれたのか？」取り敢えず、問うことに。

「…水道の水を、少々」後ろの男が言った。

「恩に着る」その答えに、俺は考えるよりも先に言葉にした。

「お陰で、助かった」俺を殴って気絶させた相手に向かって、礼を言う。俺は見事にシニールな世界を作り上げた。

「いや。さっきも、喉が枯れてたみたいだし」男は答える。そんな所まで、観察してたのか。

「それにしても…」先頭の男は、俺の頭にガーゼ？を貼付けながら言う。「本当に、財布を持ってない、なんてな」

「だから言ったのに。忘れたんだよ」…よく見たら、これ…ティッシュか？

傷口にティッシュのカスがくっつくだろうが。

… まあ、お気遣いを考慮して黙っておくことにしたが。

「忘れた？」男は不思議がつて聞いた。「…何処に？」

「さあな」俺ははぐらかした。それしか、手段がなかったからだ。

「忘れちゃったよ」

第七話

「忘れた、ねえ…」

訝しげに眉を潜める二人。「例えば、自宅とか？」

「そうかもしれないし、夕べの飲み屋かもしれない。記憶が曖昧なんだよ」取り敢えず、そう答えた。

しかし気になる。

奴等は何で、

「何で俺の財布が気になるんだ？」

正直に問うた。
だが。

「さつきから、質問ばかりだな。お前は答える側の人間だと言うのに…」

先頭の男は言った。

「…俺には答える義務も、必要ありません。離して下さい」ま、離された所で、帰る場所なんてないのだが。

ガッ。

不意に首を掴まれ、無理矢理持ち上げられる。
そのまま、呼吸がしにくい体勢に。

「あ、あの…？」「口答えるな。お前にそれを決める権限はない」

男は静かな口調で言った。

まるで、俺の喉元を掴むことなど、何とも思わないかのように。

「お前を生かすも殺すも、俺達の自由だ」造作もなく持ち上げられた上半身に、冷ややかで、かつ無感情な視線を浴びせられた。

…生かすも殺すも、か。

あの日の俺も、そんな風に考えていたのかな。
だから、あいつの首を絞めたのかな。

…それで、俺は救われたのか？

あいつを殺すことで、何か変われると思ってたのか。
思っていたから、殺したのか。

…分からない。

けど、たった一つ、確かなこと。

俺はあいつを殺したから、今、逃げて逃げてこの地に辿り着いて。

そして、今、目の前の男達に命を弄ばれている。

そう言う、運命なのかな…結局。

別に、絶望なんかしていない。
強がり、とかじゃなく。

ただ、怖くないだけ。

生きること。死ぬことも。

無常感にすら、取り憑かれたような感覚。

だって、俺はあの日から。

全うな人生を歩めないと、分かっていたから。

例えあいつを——殺していなかったとしても。

第八話

「俺を殺して、何になる？」

ぶつけたかった、問い。

絞まりそうな喉をフル稼働させてまで、言いたかった言葉。

——例えこれが、遺言となっても。

「俺一人殺したって、未来は大して変わらないが」

それは、まるで自分自身に言うかのように。

自然と紡がれた言葉であつた。

——あいつ一人殺したって、未来は大して変わらない、と。
心の何処か片隅で、そう思っている自分がいるのだろうか。

「…どうかな」先頭の男は、俺の首を掴みながら言った。「お前の価値は、俺達が決める」

「俺の、価値？」思わず聞き返す。俺には価値なんて、あるのだろうか。

「そつだ」男は肯定する。「お前は生かした方が有益か、それとも…」

首を絞める手に、力が籠もる。

「…今、此処で殺した方が有益か」

くっ…どうかしてるぜ。

たかが俺一人の命で、無益も有益もあるのか。

たかが、人、一人の命で。

「で…」 苦しくなってきた。「結果、は？」

「それは、俺が幾つか聞いてからだ」 男は俺が答えやすいように、最低限まで手を緩めた。…流石に、離してはくれなかったが。

そして、俺への尋問ラッシュが始まった。

「名前は？」

「黙秘で」

「答えられないような事情が、何かあるのか？」

「それも、黙秘で」

「何も言わないと、分からないだろうが」

「…でも、黙秘で」

「黙ってばかりだと、不利になるぞ」

「それはありません。黙秘権は全ての人間に与えられた権利であり、決して侵害されるものではないと刑事さんが特番で話してました」

「お前は…そう言う能書きは答えるのな」

「プライベートはお断りです。聞きたいのなら、一般常識だけをどうぞ」

「…呼び名がないと、色々と面倒だろうが」

「じゃあ、斎藤さん（仮）はいかがでしょう？」

「何だよ、（仮）って」

「”仮名”って意味です」

「…そうか。じゃあ斎藤、」

「ちゃんと（仮）を付けて下さいね」

「いちいち、面倒臭い奴だな。まあ…良いや。斎藤（仮）、お前に聞きたいことがある」

「何ですか？」

「お前は何処から来たんだ」

「…黙秘」

「仕事はどうした？今日は休みなのか？」

「黙秘」

「…ふざけるな」

「すいません。続けて下さい」

「続けたって、答えないだろうが…」

「そうですね」

「じゃあ逆に、何を答えられる？」

「一般常識と…その他色々」

「はしより過ぎて分からん」

「そうですね（笑）」

「おい、何で笑ってるんだ」

「間違えました。正しくは”そうですね（仮）”です」

「何だよ、（仮）って」

「仮に、俺が”そうですね”って思っていると仮定して…」

「じゃあ、実際には思っていないのか」

「黙秘です」

「何でだよ!？」

…何だか、漫才ちっくになっているようだが。

相手の男はハアハアと肩で息をしている。

…いや、発情期じゃないよ？ただ、ツツコミが多いだけで。

「…取り敢えず、お前に聞きたいことがある…」

「はい、何でもしょう」「俺はこの問いに答えるのは何度目だろう、とか考えながら聞いた。」

「…お前は何で、この土地にいる？」

それは。

黙秘云々（うんぬん）ではなく、まさしく俺の答えられない問いだった。

第九話

「…それは…」

答えに困る。どうしたら。

「それは？」男は俺の返答を促した。

答えられない。

そう、言うしかなかった。

「…黙秘で」

俺は、さっきからずっと逃げている。

”黙秘”と言う言葉で。

身を守るだけのつもりが、自分の全てを、自分自身からすらも隠しているよう。

俺は、一体、

「一体…何を考えているんだろう」

よく、分からない。自分でも。

「…どうした？」

男にそう言われ、初めて俺は呟いていたことに気付いた。

「…いや…」そして俺は、また誤魔化す。「…何でもない」

「…そうか。なら良いんだ」男は言った。「ただ、理由があるのかと」

「…理由？」「此処ら辺は皆、ホームレスが集まる土地で有名だからな」

ホーム、レス？

「知らない…かった」

「だろうな。一般人の来る所じゃねえよ、追いはぎにでも遭ったらどうする」

そう言うてから、男はバツの悪そうな顔をした。

「…って、今の俺達こそ、まさしくそうだな」

ホームレス、か。

成る程ね。

「だから、俺の財布が気になったのか」「まあ、そんな所だ」

しかし顔つきは鋭くなり、

「それ以外にも、理由はあったが」
そう言った。

「これが、最後の質問だ」

時と場合によつては、これが”最期”の質問にもなり得る。

「お前…帰る場所はあるのか？」

その問いが、俺を今まで引き留めていた何かから解放されるきっかけとなった。

その瞬間、俺は、泣き出した。

多分、せき止められていた何かが崩れたんだと思う。

俺はどうすることも出来ずに、ただ、溢れ出て止まらない涙を流し続けた。

もう、黙秘なんて、

…強がりには嫌だ。

「…あ、ありま…せん…」
やっとの思いで、答えた。

もし、此処で殺されるのなら、最後に取り乱すような真似をして気恥ずかしい。

けど、俺は逃げなかった。

初めて、自分の人生に、正面から向き合った。

だから、多分、このままで良い。

そう思っていた。

そんな俺に、その言葉はかけられた。

「質問は以上だ。結果…お前を生かすことにする」

その言葉をきつかけに、後ろの男は金属バットを離して俺の自由を縛る縄を解き始めた。

…今までずっと、バット持ってたのかよ。なんて、ツッコむ余裕すらなかった。

男は笑いながら、こんなことを言い出したから。

「俺達と一緒に…暮らさないか」

…一人で逃げてばかりの自分に、新しい居場所が出来た。

第十話

…で、どうしたことだろう。

俺は、その男の言葉に肯定すべきかどうか迷っていた。

確かに、一緒に生活出来る人達が居るのは心強い。
それも、五十人近くいる仲間達だ。

…だが、迷惑はかけられない。

俺は犯罪者だ。

しかも、逃亡中の。

他の皆には、迷惑はかけられない。

…どうしたことが。

俺は頭を抱えた。

かと言って…今、この誘いを断つても、俺の居場所なんてない。

だから、だから…。

「しばらくの間、お世話になります」

しばらくの間。

俺は、予防線を引いていた。

一時、心を許して泣いた俺だが…落ち着いてしまえば、また元通りなのだ。

元通り、臆病な男のまま。

「もし、迷惑がかかりそうなら…俺は黙って、此処を出て行くつもりです」

「…他に行くあても、ないのに…か？」男は聞いた。先程、俺の頭にティッシュを乗せた男だ。

…あ。傷口、やっぱりカスだらけになっていた。

「例えなかったとしても。皆さんに…迷惑はかけられない」

少し離れた所で、俺を殴った男がバットに付いた血を拭いていた。水で濡らしたら、錆びるのだろうか。

「…そうか。まあ、好きにすれば良い」

男は答える。

「元々、訳ありな人間の集まりだ。気にしない。ただ…出て行く時は、一言頼む。考えたくはないが、もし仲間を拉致されていたとしたら…俺はリーダー（仮）として、皆に顔向け出来ない」成る程…この人もちゃんと、仲間のことを考えているんだ。って、

「リーダー（仮）って、どう言うことですか？」

「んー、そのまんまさ。もし俺が死んだら、リーダーじゃなくなるんでな」「それ、何十年後の話ですか…」俺は呆れた。

「いや、そう遠い未来でもないさ」リーダー（仮）は言う。「ホームレスなんて、安定しない生活のままじゃ…明日だって、生きられないかもしれない」

嫌に、現実味を帯びた言葉。

少し前までの俺なら、”ふーん、そっか”で終わる気がした。

だが、今は違う。

ホームレス、に。

多分、自分自身が片足を突っ込んでいるからだ。

そして…きっと、両足を突っ込むことになる。

この身体は、いずれズブズブと——まるで底無し沼に身を投げ出したかのように、この生活に馴染んで行くのだろう。

一見、平穩そうに見える生活の中。

逃亡中の指名手配犯として、

あいつを殺した犯人として、

追われる立場だと言う、恐怖に怯えながら。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6704x/>

twilight world

2011年12月17日21時50分発行